

大正・昭和の大礼後式場拝観に関する公文書・新聞史料の調査

鈴木貴裕 日本史学分野・専門 博士前期課程2年

はじめに 大礼後式場拝観（以下、式場拝観と表記）とは、1915年11月に大正天皇が、1928年11月に昭和天皇が即位大礼を行った後、京都御所などに置かれた紫宸殿・大嘗宮・饗宴場の主に3つの大礼式場が、国民に対して公開されたものである。これらは二度とも即位大礼後の12月から約5か月間にわたって行われ、期間中に数百万人が訪れるほどの一大イベントであったが、先行研究ではあまり取り上げられてこなかった。しかし、式場拝観は当時の国民が即位大礼を身近に感じられる数少ない機会のひとつであり、検討の余地があると考えられる。そこで本プロジェクトでは、東京と京都での史料調査を通して、式場拝観について大きく2つの点について明らかにすることを目標に掲げた。1点目は式場拝観がそもそもどのように計画・実行されたのか、2点目は式場拝観にどのような意義があったのかである。

なお、採択時のプロジェクトタイトルは「近代の大嘗宮一般公開に関する公文書・新聞史料の調査」であったが、より広範な議論にするため、大嘗宮の公開のみを取り上げるのではなく式場拝観全体を研究対象とする方針に変更したことにより、報告書ではタイトルを変更している。

史料調査①——宮内公文書館 閲覧室の利用は事前予約制であり、1週間ほど前に電話で日時と閲覧予定の史料を伝えて予約を取った。当日は北桔橋門から皇居に入り、公文書館の入る宮内庁書陵部庁舎を訪れた。ここでは、即位大礼の公式記録である「大正大礼記録」と「昭和大礼記録」の調査を、5月と10月にそれぞれ行った。これらはともに巻数が多いが、それを1冊にまとめた簡易版である『大礼記録』（清水書店、1919年）や『昭和大礼要録』（内閣印刷局、1931年）をWEB上で閲覧することでも研究は可能である。しかし、今回原史料を調査したことにより、簡易版では削られていた記述を発見することができたのはもちろん、より明確な根拠をもって議論することが可能になった。なお、「昭和大礼記録」は予約の段階ではどの巻にどのような内容が記されているかが分からなかったため、事前の電話では目次にあたる巻を閲覧予約した。そして当日は、目次から自分の見たい内容が載っているような巻を調べ、追加で閲覧申請するという形を取ったことで、スムーズに調査が進められた。

史料調査②——国立公文書館 閲覧室の利用に予約は必要なく、10月の調査当日は入口で受付をしたのみで利用できた。閲覧史料は事前にデジタルアーカイブで検索しておき、当日閲覧申請をした。ここでは、「大正大礼記録」や「昭和大礼記録」作成の元になった一次史料があるのではないかとの見込みの下で調査を行ったが、それらに引用されていない史料も数多く発見できた。ここで発見した史料は先行研究でも使われておらず、重要な成果であったと考える。なお、宮内公文書館と国立公文書館での調査では、大学の講義で古文書の扱い方を学んでいたことが役に立った。本物の文書を扱う機会がこれまであまりなかったため、大学での学びを実践できた点でも貴重な経験だった。

史料調査③——京都府立図書館 入館予約などは必要なく、9月の調査当日は2階のマルチメディア閲覧室を直接訪問した。ここで調査した史料は、『京都日出新聞』という当時京都で発行されていた地方紙である。これは京都の都市史などの研究ではよく使用される史料だが、式場拝観に関する研究で用いられたことはなかった。しかしイベントの規模からして多少は関連する記事があるだろうとの見立てで調査を行い、結果的に全国紙に比べて内容も豊富な多数の記事を発見することができた。これらは論文中でも多く引用するなど、その後の研究において中核をなす史料となった。なお、この図書館では『京都日出新聞』がマイクロフィルム版で所蔵されており、当日はマイクロフィルムリーダーで閲覧した。大きな画面に映し出された紙面を至近距離で見ながらの調査は大変だと聞いていたが、次々と興味深い記事が見つかるため、時間を忘れて1日中画面に見入っていたことが記憶に残っている。

史料調査④——国立国会図書館 最初に訪問した5月の段階では、コロナ禍のため、日付を指定して予約を取り当選すれば訪問できるという抽選予約制が取られていた。10月に再度訪問した際には、人数制限はあったものの予約はいらず、制限は緩和されていた。ここでは館内限定で公開されている史料の調査を行った他、他の図書館ではマイクロフィルムリーダーの調子が悪くはっきりと読み取れなかった部分を最新の機器で見直すなど、他での調査を補完する形で利用した。

史料調査の成果 まず式場拝観の計画段階について、自治体や学校など、国民側からの要請に応えるという形をとって計画が始められたことが分かった。一方で、昭和度には宮内省内に専門の部署が設けられるなど、宮内省側もこのイベントを重視していたと考えられる。また、大正デモクラシーの風潮により皇室にも民主化を求めるような動きが広まっていた当時、身分制限を設けずに拝観が許可されたことは式場拝観の注目すべき点である。当時、京都御所の拝観は身分の高い人などにしか許可されていなかったのが、式場拝観の期間だけはそれが解除された。それに加え、特定の団体や個人を優遇するよう求める要望が拒否されている事例からも、平等性を保つことが式場拝観において重要であったことが分かる。

また、二度の式場拝観には3つの意義が共通して見られることが分かった。1つ目は、拝観した子どもたちに天皇制への支持を広げるという「教育的意義」、2つ目は、全ての国民に拝観を許可することで天皇制への支持を取りつけつつ、その権威も再確認させるという「国民教化的意義」である。これらに加えて、式場拝観によって利益が得られるという「商業的意義」も見出された。この「商業的意義」は先行研究ではあまり重視されてこなかったが、式場拝観に多数の国民が訪れたのは、娯楽的な楽しみを求めた人々が鉄道会社の宣伝合戦などによって式場拝観に誘導されたことによる部分が大きかったと考えられる。

まとめ——史料調査を通して まず、コロナ禍における史料調査では事前の計画がより重要になると感じた。訪問に事前予約が必要な機関もあったが、それは予め調査の行程を決めておく必要があり、またその通りにしか動けないということでもある。計画的な行動が必須といえるだろう。しかし、制限が緩和されて以降の調査では、余った時間に急遽国立国会図書館を訪れるといった、臨機応変な行動も可能になった。今後こうした機関の利用制限がどうなるかは不明だが、コロナ禍の記録として残しておきたい。

また、遠方に史料調査に行くことの難しさもあった。遠方の機関に何度も通うことはできず、またコロナ禍の影響で突然移動が制限される可能性もあったため、一度の調査で十分に史料を集めないと再度そこに行くことはできない、との意識で調査に臨む必要があった。それにより幅広く史料を集めておいたことで、調査の過程で修士論文のテーマを変えた際にスムーズに対応できたのはよかった点である。しかし、それでも足りないものが出てきたため、後に国立国会図書館を再度訪問することになってしまった。そのときは感染状況も落ち着いていたので急遽追加の調査を設定できたが、場合によっては史料が足りない状況で修士論文を書かなければならなくなる可能性もあっただろう。これは本プロジェクトを通しての最も大きな反省点であり、今後の史料調査の際にも意識すべき点であると考えられる。

参考文献

- 伊藤之雄 (2010) 『京都の近代と天皇—御所をめぐる伝統と革新の都市空間 1868～1952』千倉書房。
 河西秀哉 (2013) 「歴史を表象する空間としての京都御所・御苑」高木博志編『近代日本の歴史都市—古都と城下町』思文閣出版。